

2021年 7月18日(日) ① 13時開演 ② 17時開演
令和三年度三刀屋高校演劇部上演台本

水底平家

くみなそこへいけく

作・亀尾佳宏(顧問)

トキヒト・・・笛の好きな少年

芳一・・・少年を平家の物語へと誘う僧

平知盛・・・平家の智将 落ち延びた一族をまとめ再び都へと迫る

平教経・・・平家の猛将 一人当千の兵

平敦盛・・・平家の武将 笛の名手

平知章・・・平家の武将 知盛の息子

平清盛・・・武士として初めて政権を握る

二位の尼・・・清盛の妻であり帝の祖母

徳子・・・清盛の娘であり帝の母

源義経・・・源氏の大将 戦の天才

熊谷次郎直実・・・義経の家臣

波の音。

海辺に佇む一人の僧。何かつぶやいているようにも歌っているようにも見える。

僧

昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでおりました。・・・違うな。これじゃ日本昔ばなしだ。えー、昔々、竹取の翁というものありけり。これも違うな。

僧は物語を考えているようだ。そこに笛の音が聞こえてくる。

僧

なるほどね、音楽ね。いいじゃん。やっぱり物語にあう音楽も必要だよね。

僧はリコーダーと物語を無理やり重ねようとする。リコーダーの音が外れる。物語も変な節になる。

僧

おい！

少年

え？

僧

え？じゃないよ。下手すぎだろ。

少年

僕がその不思議なおじいさんに出会ったのは夜明けの海辺でした。どこからきて、いつからそこにいたのか、僕にはわかりませんでした。まるで笛の音色に誘われて海の向こうからやってきたみたいに、おじいさんはいつの間にかそこにいました。初めて会ったはずなのにどこかで会ったことがあるような気もして。だから僕はこう尋ねたんです。「おじいさんは何をしてるの？」

僧

おじいさんじゃない。お兄さんだ。

少年

そう不機嫌そうに答えました。どこまでがお兄さんで、どこからがおじいさんなのかそれは難しい問題です。僕はもう一度ゆっくり聞き直しました。「おじいさんは、何をしているの？」おじいさんは「OK！わかった」というそぶりをした後、こう答えました。

僧

俺は考えてるんだ。物語を。

少年

物語？

僧

そう。とっても面白い物語。

少年

へえ！すごいね。どんなお話？

僧

昔々の、戦いのお話。

少年

戦い？桃太郎が鬼と戦ったり、猿と蟹が戦ったり？

僧 おいおいよしてくれ。俺の語る物語はそんな子供騙しじゃない。知ってるか？昔々、海へと沈んだ平家一門の物語。

少年 そういうとおじさんは「源氏」と「平家」の話を一生懸命してくれました。

僧 あのな、昔平清盛ってすげーっええ男がいてな、その息子が重盛、宗盛、知盛っつって・・・盛が・・・経と、・・・経に・・・盛と・・・

少年 ちよっと待って。

僧 え？

少年 全然わかんない。

僧 え？

少年 ぜんぜんわかんない。モリとかツネとかいつぱい出てくるけど似た名前の人が多すぎてどっちが平家でどっちが源氏とか全然わかんないから。

僧 えー、わかるでしょうよ。知盛だよ、教経だよ。

少年 わかんないって。おじさんさ、もうちよっと登場人物整理した方がいいよ。人数減らすとか名前変えるとか。あとさ、時代も変えたら？現代に。武士とかって言われてもよくわかんないし。

僧 かーっつ！

少年 ええ・・・。

僧 少年！なんてひどいことを言うんだ前は。物語にとってもっとも大事なところそれが。いつの話なのか、誰の話なのか。

少年 いっなのか、誰なのか？

僧 そう。「時」と「人」だ。

少年 僕は思わず笑ってしまいました。だってそれは、僕の名前と同じだったから。

僧 お前の名前は？

少年 「トキヒト」

僧 トキヒト！？なるほどそういうことか。

少年 何？何ひとりで納得してるの？

僧 よし！この物語にお前を出してやる。

少年 え！ダメでしょ。今「人」が大事っていったばかりじゃん。登場人物替えたらだめでしょ。

僧 いや。この物語にはお前が必要だ。トキヒト、お前がいれば俺の物語は出来上がる。

少年 僕が？なんで？

僧 それは・・・すぐにわかる。

僧は去ろうとする。

少年

おじさん。

立ち止まる。

少年

おじさんの名前は。

僧

芳一。

少年

芳一？って、もしかして耳なし！

僧

おいおい、よく見る。耳ないか。

少年

耳、あるね。

僧

あるとも。よく聞こえる耳が。ほら、さっそく聞こえてきた。トキヒト、お前にも聞こえるだろ、今は亡き平家のさぶらいどもの歌声が。

かすかな声とともに平家の人々が現れる。

群集

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰のことはりをあらはず

奢れる人も久しからず

ただ春の世の夢の如し

猛き者もつひには滅びぬ

ひとへに風の前の塵に同じ

芳一

おこれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。夢から覚めちまう前に聞いとくれ。ひとたび俺が語りだせば鬼神も涙を流す、平家と呼ばれた一族が海へと消えた物語。ただし全部は長すぎる。どの段をこそ望かな？どの段をこそ望かな？おっとその前に。トキヒト。どうやらこの物語は、お前をこそ望だ。

平家の人々は少年を捕まえる。押し寄せる波が時と人とを包み込む。

——第三場・流れ流れて——

トキヒト、人々に囲まれている。平教経・知章・敦盛。徳子らがいる。

教経 ミカド！

トキヒト え？（目覚める）

知章 おお！目覚められたぞ。

周囲の者たち 「帝が目覚められた」と、喜びの声にざわめく。

トキヒト 目が覚めると、僕は帝になっていた。

教経 帝がご無事でなにより。

トキヒト ごめんなさい。喜んでいらつしやるどころ申し訳ないんですけど、僕帝じゃないです。

人々動揺する。

敦盛 帝ではなくなんだとおっしゃるのですか。

トキヒト 帝じゃなくて、トキヒト。僕の名前はトキヒト。

一瞬の間の後、人々は安堵する。

トキヒト あれ？何この反応。

高貴そうな女性がひととき大きな声で笑う。

徳子 ようやく正気に戻られましたな。

皆、喜ぶ。

少年 わかってくれた？帝じゃなくて、トキヒト。

知章 確かに帝のお名前はトキヒト様。即位前はトキヒト親王であらせられました。

少年 え！帝ってトキヒトって名前だったの？

正気に戻ったと思ひ、皆がなごむ。

少年 ところで、あなたはどちら様？

徳子 まあ！

少年 ……だって知らないし……。

教経 徳子様は帝の母君ではございませぬか。

少年 僕の、お母さん？……違うよ。全然違う。

徳子 おお、おいたわしい。私のことをお忘れとは。帝、そこにお座りください。

少年 だから帝じゃないって。

徳子 帝！

少年 はい！（座る）

徳子 よいですか。西国に追われているとはいえあなたは帝。しつかりなさってくださいまし。

皆、平伏する。

少年 ごめんなさい。じゃあ帰ります

知章 帝、どちらへお帰りに。

少年 決まってるでしょ。僕のうちだよ。

皆、泣く。

知章 帝、都が恋しいのは我らも同じ。しかし、今は帰る場所が……。

敦盛 まだ幼き身。やはり無理にお連れしたせいでしょうか。

教経 帝、いつか必ず都へ帰る日が参りましょう。しかし今はまだ……。

皆、泣く。

少年 なんだか大変なことになってしまった。

一人の僧がどさくさに紛れて帝の近くへ寄る。

少年 あ！芳一！

芳一 し！

少年 どこなのここ。

芳一 ここは平家物語。

少年 なんでそんなことになってんの？ねえ、僕どうしたらいいの？

芳一 落ち着けて。なんにもしなくていいから。

少年 え？

芳一 お前はただ見てりやいい。帝として、この時代を。そうすりやきつといい物語が
できあがる。

少年 え？何言ってるの？全然意味わかんないんだけど。

トキヒトは怒っている。人々はそのようすに気づく。

武士1 おい、帝がお怒りだ。

武士2 なんだあの坊主は。

芳一 (言い訳をする)

教経 怪しいやつ。とらえよ。

芳一は逃げる。人々は追う。

入れ替わって一人の立派な武士入ってくる。

一人の立派な武士入ってくる。

知盛 なんだなんだ！なんの騒ぎだ！

知章 父上。

敦盛 帝が正気に戻られました。

知盛 おお、そうか！それはよかった！帝の身に何かあったら我ら平家の一大事じゃ。

トキヒト うわ！また出てきた。あのーどちらさま？

知盛 ……正気ではないではないか。

敦盛 知盛様にごさいます。

トキヒト 知盛？あなたは？

敦盛 敦盛にごさいます。

トキヒト あなたは？

教経 教経にごさいます。

トキヒト あなたは？

知章 知章にごさいます。

トキヒト 知盛、敦盛、教経、知章・・・だから盛と経ばっかりでややこしいんだよね。も

うちよつとわかりやすい名前にした方がいいと思うんだけど。名前変えない？

知盛 ……。敦盛、お連れしろ。

敦盛 帝、こちらへ。

トキヒト ん？どこ行くの。

敦盛、トキヒトを連れて行く。

教経 一体どうなされたというのだ。

知盛 帝はまだ幼い。まあよいではないか。

知章 父上！お言葉が。

知盛 それはそうとな、教経、知章、二人に話しておきたいことがある。

教経 頼朝からの書状にございますか。

知盛 いかにも。

知章 頼朝はなんと、

崖の上に二人の男が現れる。

熊谷 義経様！義経様！危のうございます！お戻りください。

義経 熊谷、見てみい。良い眺めではないか

熊谷 このようなどころで何を見よとおっしゃるのです。足を滑らせ落ちられでもしたら、私が頼朝様よりお咎めを受けます。

義経 そうなれば熊谷、一つ記しておいてくれ。「源義経物語最終話、義経、崖から足滑らせ落ちにけり」後世の者の目を喜ばせてやろう。

熊谷 そのような愚か者の物語、目をとめるものなどおりませぬ。

義経 読む者はおらんか

熊谷 それよりも今は平家が頼朝様からの書状をよんでおる頃

知盛 「このたび、帝、三種の神器が御所を出でて西国の海に漂うことをもって日本国

の嘆きにして亡国の礎。速やかに返し奉りなば、平家の悪行許さるべし」

知章 なんと！

教経 帝と三種の神器を返せとはよくもぬけぬけと申せたもの！

知盛 和睦を結びたきとのことのようにや

知章 返しの文、いかがいたしますか。

教経 文を返す必要もない。使いのものを斬り殺すにしかず。

知章 使いの者など斬ってなんの意味がありません。

知盛 何か考えがあるのか。

知章 引っおわるやもしれぬ戦の日々に人々は皆疲れ果てております。

教経 それは我らとて同じ。しかしながらその日々もあとわずか。

知章 畏れながら申し上げます。このあたりが潮時かと。

教経 知章！どうしたのだ。

知盛 教経。

知章 父上、この機に頼朝が書状をよこしたのは我らを恐れているからにほかなりませぬ。和睦は機を見てせよとは古くから言われる言葉。其の機が今でございます。恐れている敵に手を差し出す愚か者がどこにいる！

知章 教経様よくお聞きください。教経様であれば百の兵で万の敵を蹴散らすことなど易きことにございませう。

教経 知れたこと。

知章 しかしその百が、万の敵の代償に失われるかもしれないぬ百の命をどうなさるのです！頼朝は憎き敵。しかしながら帝と三種の神器が都に戻りましたならば、再び平家の世を築くこともかないませうぞ！今、今こそ。

知盛 知章、お前の気持ちよくわかった。

知章 父上！

知盛 しかしな、この話受けるわけにはいかぬ。

！

知盛 頼朝の父義朝はその父為義を斬っている。頼朝もまた弟義経を使いいいところである木曾義仲を討ち取らせた。源氏はな、情けということを知らぬのよ。三種の神器を何ゆえ頼朝は欲しがる。

知章 それは、安寧なる政のため。

知盛 そう思うか。．．まことお前は情け深い男。しかしな、頼朝には人の血が通うておらぬ。源氏の血を斬ることをいとわぬ男が、平家の血を引く帝を斬らぬと思うのか。

知章 それは．．．

知盛 三種の神器は帝の証。それを手にした頼朝は新しき帝を立てるであろう。そうなれば、我らは朝敵。

知章 頼朝をはじめから．．．

知盛 和睦を結ぶ気などない。

知章 では何故あのような書状を、

三人は消える。

義経 読むかな。

熊谷 読んでおりましたよ。

義経 義経物語．．．

熊谷 読みませぬ。

義経 先ほど読んでおると申したではないか。

熊谷 それは書状のこと。愚か者の物語のごとくはございませぬ。

義経　しかしここは高いな、おっとっと、
熊谷　ですから危ないと申しておるではありませんか
義経　ここから落ちたらよい物語ができるな
熊谷　またその話でございますか
義経　熊谷、お前はどうか読む
熊谷　だから読みませぬ
義経　平家の布陣を。
熊谷　。。。
義経　見てみい。良い眺めではないか。
熊谷　。。。。もしやそのためここにへ。
義経　「平家物語最終話、おこれる平家は久しからず」長く後の世に読み継がれる、
愚か者の物語。

二人は山へ消える。

波の音。少年と敦盛が現れる。

敦盛 帝！お待ちください帝！
少年 だからね、帝じゃないの。それとね、言葉遣いなんとかならないかな
敦盛 とおっしゃいますと
少年 それ！「とおっしゃいますと」年、あんまりかわんないでしょ。
敦盛 どういうことばでございましょう
少年 またあ。「どういうことばでございましょう」「わざとやってる？」
敦盛 おっしゃっていることの意味が・・・
少年 もういい！
敦盛 申し訳ございません！

トキヒトは笛を吹く。

敦盛 帝！その笛はなんという笛でございましょうか！
少年 え？
敦盛 そのような音色は初めてにございます。
少年 そう？普通のやつだけど。
敦盛 おそらくは宮中に伝わる秘宝かと・・・。
少年 あげるよ。
敦盛 え？
少年 欲しかったらあげる。
敦盛 なりませぬ。帝の大切な笛を頂戴するなど・・・。
少年 いいから。好きなんでしょ、笛。

少年、敦盛に笛を渡す。

敦盛 この笛は・・・。
少年 どうしたの？
敦盛 このような珍しき笛は見たことがございません。
少年 そう？こんな最近じゃ百均にでもあるんじゃない。
敦盛 「百金」！そんな高価な笛やはり受け取れません。
少年 違う違う。百の金じゃなくて百円均一！
敦盛 「ひあくえんきんいつ」・・・？なんだかわからないですがやはり頂戴するわけには・・・。
少年 もう、そうじゃなくて！

二人で譲り合いをしていると、笛が地面に落ちる。敦盛焦る。

敦盛 うわああああ。なんということを……。

敦盛 おもむろに正座をし刀を抜こうとする。

敦盛 桓武天皇より九代の後胤平忠盛が三男、平経盛の三男、無官太夫平敦盛、この一

の谷の浜において……。

少年 ちよ、ちよっと。

敦盛 は、

少年 何すんの？

敦盛 腹を切ります。

少年 なんで！

敦盛 帝の大切な笛を傷つけて、なんでおめおめと生きておれましょう。「桓武天皇よ

り九代の……」

少年 わー大丈夫！ほら、大丈夫。普通に吹けるし。(音を出す。失敗して変な音を出す。あ……。

敦盛 桓武天皇より九代の後胤……。

少年 今の失敗。悪いの僕だから！

敦盛 申し訳ございません！

少年 重いよ、君。

敦盛 帝に命お救いいただきましたからにはこの敦盛、次の戦にて良き敵の首をとってご覧にいたします。

少年 知らないよ、首。ところで、さっきの、何？

敦盛 先ほどの、とおっしゃいますと。

少年 「桓武天皇よりなんとかかんとか」ってやつ。

敦盛 名のりをあげさせていただきました。

少年 「ナノリ」？

敦盛 私が誰の子孫で、何者であったのか。そしてどのように生き、どのように死んだのか、後の世に語り継いでいただくための、証にございます。

少年 語り継がないよ。僕のせいで死んじゃったみたいだし。

敦盛 帝のためならば喜んでこの命を。

少年 だから重いってば。名前は？

敦盛 桓武天皇より九代の後胤平忠盛が

少年 それはもういいから。

敦盛 平の敦盛にございます。

トキヒトは敦盛に笛を渡す。吹き方を教える。

トキヒト そうそう。ドレミファ……。

敦盛 なんでございますか、その「どれみ」というのは……。

トキヒト もう！いいから気にしないで！

敦盛 切腹いたす。

トキヒト なんてそうなるの！

えんえんと続く二人のやりとり。山手に浮かび上がる二人の武将の影。

義経 あの二人はいったい何をしておるのだ……。

熊谷 おそらくは笛の稽古かと。

義経 笛の稽古？気楽なものだな。

熊谷 平家は戦場においても風雅の心を忘れてはおらんようすな。

義経 「風雅」？そんなもの何の役に立つ。

熊谷 都暮らしが長かりければ、おそらく恋しいのでしょう。

義経 いくら恋しく思うたとて、二度と戻ることあるまいに。

熊谷 しかしながら義経様、平家はここの地形を熟知しておると思われますゆえ、守りを固められると少し厄介かもしれません。

義経 東の生田の森と西、一の谷。……さて、熊谷、は。

義経 此度の戦、どのように攻めようか。

熊谷 大手、搦め手、二手に分かって攻め上るが兵法かと存じます。

義経 東西から挟み撃ち。

熊谷 しかし落ち延びているとはいえ平家は一人当千と聞こゆるつわものぞろい。左様。

義経 中でも知盛、教経は天下無双と聞こえております。

熊谷 しかし所詮やつらは海辺をさまよう浮き草。流れ者に地は味方せぬ。

義経 時が経てばその浮き草にも根がはりましょう。

熊谷 浮き草に根か……。

義経 やつらは海を自在に操りますゆえ、時を与えれば波間より草に血肉が行き渡りまする。

熊谷 その通り。

義経 いかがいましてしょう。

義経 平家が土と波とを味方につけ時をかせぐなら、こちらは風と火とを味方につける。
熊谷 風と火・・・。
義経 やつらは海に浮かぶ姿が似合っておる。
熊谷 根を張る前に討つ、と。
義経 東の生田は範頼殿にお任せしよう。熊谷殿、そなたは一の谷で先陣つかまつれ。
熊谷 義経様は、
義経 俺には少し、考えがある。
熊谷 風と火、ですか。
義経 この戦、時の速さが勝負を決める。

義経、熊谷山に消える。

——第五場・時の流れ——

敦盛、笛を吹く。けっこううまくなっている。

知盛 不思議な音色ですな。

教経 まるで異国から響いてくるようです。

知章 いつの間にこのような曲を。

トキヒト 敦盛すごいんだよ。センスある。

知盛 これはなんという曲にございますか。

トキヒト 「浜辺のうた」

知盛 「浜辺のうた」。

トキヒト 「あしたはまべをさまよへば むかしのことぞしのぼる」

徳子 浜辺をさまよいながら昔の都暮らしを恋しく思う、われら平家をうたっているよ

うではありませぬか。

教経 まさにその通りですな。

徳子 私は気に入りましたよ。

トキヒト じゃあ国歌にしたら？

徳子 「コツカ」？

トキヒト ああ、国のうただったってこと。

教経 「国のうた」？

トキヒト ほら、なんか行事のときにみんなで歌うやつ。

教経 行事のときにみなで歌う、

徳子 それはよい。本日は亡き清盛公の命日、ちようどよい。

一同盛り上がる。

「浜辺の歌」をみんなで歌う。

教経 それでは源氏を滅ぼしたあとはこの歌を国の歌と定めましょう。

徳子 それはよいお考えです。

盛り上がる。

トキヒト あの・・・その話なんだけど・・・。

知盛 なんですございましょう。

トキヒト 源氏と戦うの、やめない？

一同 ！

トキヒト やっぱりさ、戦って危ないじゃん。死んじゃうかもしれないし。

一同、泣く。

徳子 嘆かわしい。

知盛 帝はまだお若いゆえ、いたしかたありません。

教経 源氏と戦せずして平家の行く末などありません。

トキヒト 戦しても行く末はないと思うけど……。

徳子 帝！

知盛 安心なさいませ。我らが帝をお守りし、この戦に勝利した後には都へ戻る事が
できましょう。

トキヒト そうもいかないんだよな。

知盛 と、言いますとす

トキヒト 平家は、負けちゃうんだよ。

教経 なんとということ……。

徳子 嘆かわしい……。

知盛 帝はまだお若いゆえ……。

トキヒト だって僕未来知ってるもん。平家は源氏に負けちゃうんだよ。

敦盛 「未来」とはなんでございましょう。

トキヒト 先の世の中ってこと。もう決まってるんだから。

一同沈黙。知盛笑い出す。

知盛 「先の世」ですか。帝はおもしろきお話をなさる。

トキヒト 全然面白くないんだけど……。みんな、怖くないの？

教経 怖い？なぜでございます。

トキヒト だって、戦って、こう、殺しあったりすんでしょ。

教経 もちろんにございます。

トキヒト ってことは、死んじゃうかもしれないし。

教経 もちろんにございます。

トキヒト 不安じゃない？

知盛 不安はございます。

トキヒト でしょ、やっぱり死ぬの怖いってことじゃん。

知盛 そうではございません。

トキヒト え？

教経 我らが恐れておるのは、名を残すことなく討たれること。

トキヒト 「名を残すことなく」……。

教経 武士として生まれたからには、名を残して死にとうございます。

トキヒト そんな……。

知盛 それでは皆も本日は休まれよ。明日の朝には源氏が攻めてまいるゆえ。
トキヒト 明日！
教経 今宵は兵を休ませます。

徳子、二位の尼、教経、敦盛去る。
困惑するトキヒト。

トキヒト ちよ、話聞いてよ．．．
知盛 帝。

トキヒト はい。

知盛 先ほどのような話は、以後なさらぬようお願い申し上げます。

トキヒト 先ほどの？

知盛 我らが、負ける、と．．．

トキヒト だって．．．

知盛 お願い申し上げます。

トキヒト とにかくね、平家は負けちゃうの。先の世の中では、そう決まってるの。

知盛 帝は、海に落ちられた折、悪い夢でも見ておいでだったのでしょ。

トキヒト 夢じゃないって。むしろ今のほうが悪い夢かも。

知盛 先の世とは今より後の世にございます。今ここに生きていらっしやる帝がどうしてその後の世をご覧になることができますしよ。

トキヒト それは．．．

知盛 よしんは負けることがわかっておったにせよ、この戦、取りやめることはなりませぬ。

トキヒト どうして。負けるってわかってるなら戦わないほうがいいじゃない。

知盛 それは道理に合いませんな。

トキヒト どこが！めちやくちや道理じゃん。

知盛 それではお尋ねいたします。死ぬことがわかっておりますれば、人は生きることがやめるのでしょうか。

トキヒト ．．．

知盛 明日は殺すか殺されるか、私には先のはわかりませぬ。ただ一つわかっておりますのは、今を生きるためには戦わねばならぬこと。

トキヒト でも死んじゃったら．．．

知盛 人はいずれ死にます。死んでなお生きるためには、やはり戦して名を遺すしかありませんな。

トキヒト ．．．

笛の音が聞こえてくる。

知盛 敦盛か。

トキヒト ……すごいね。すぐ覚えちゃうんだから。

知盛 あの者は笛の名手にございますれば。

トキヒト ……敦盛も、誰か殺してきたの？

知盛 敦盛は、明日が初陣にございます。

トキヒト ウイジン？

知盛 初めての戦ということにございます。

トキヒト 初めて！それって大丈夫？

知盛 誰もが皆、その道を通してゆくのです。

トキヒト その道の行く末は？

知盛 未だ知らず。

トキヒト え？

知盛 先の世のことは先の世に生きるもののみ知ります。我らはただ、返るのみ。

トキヒト カエル？

知盛 都へ帰り、平家の世に帰る。ただ来た道を、引き返すのみ。

トキヒト 引き返す…。

知盛 心配めされるな。間もなく都。帰るためにはここに根をはりめぐらせねばならぬ

ゆえ、帝は笛の音お聞きあそばしながら、寝給へ。

トキヒト 出て行く。

笛の音が聞こえている。

教経が入ってくる。

教経 知盛さま、源氏の動きやいかに。

知盛 間もなく九郎判官義経を総大将とした軍が攻め込んで参るであろう。

教経 義経？頼朝の弟か。返り討ちにしてくれる。

知盛 そう容易くもいくまい。

教経 知盛さまと私がおれば恐ることなどありません。

知盛 いや、五分五分といったところか。

教経 五分五分？源氏の九男坊をえらく高く見積もっておられるのですな。

知盛 だからここ、福原なのだ。

教経 なるほど。この地は海に面しており、背には山。交通の要衝にして天然の要害。

知盛 さて教経、そなたならどう攻める？

教経 そんなもの子供でもわかる。東は生田の森、西は一の谷、東西から挟み撃ち。

知盛 そう、攻めるならそこしかない。
教経 となれば我らのとる策は、
知盛 まず東西南北の砦を固める。敵の攻め上る方角さえわかっているならば守るはやすし。
教経 なるほど。
知盛 落ちぬ砦とあらば敵の士気もいずれ下がる。五分は七分に、七分は八分になる。
教経 さすがは知盛様。
知盛 教経、義経はどう攻めると読む？
教経 おそらくは本隊を東の生田の森へ差し向け、別働隊を西、一の谷へ。
知盛 そなたならどちらを選ぶ？
教経 少ない手勢で敵をおとす、迷わず一の谷。
知盛 そこで教経に頼みたいことがある。
教経 「西を守れ」と。
知盛 いや、違う。
教経 では本隊の来る生田の森か。
知盛 それも違う。
教経 どういうことでございますか！この教経に戦うなど。
知盛 そうではない。
教経 ……
知盛 山の手よ。
教経 山の手？
知盛 やつはおそらく裏をかく。こちらが西と読めば東へ、東と読めば西へ、そのどちらもふさがれているとあらば、
教経 残るは背後の山手…。
知盛 西へは忠度の軍を向ける。東はこの知盛が防ぐ。
教経 そして私が北…。
知盛 たびたびのことで申し訳なく思うが義経は手ごわき敵。そなたに任せたい。
教経 何度でも結構。能登守教経、手ごわい方を引き受けましょう。
知盛 これで八分は九分になる。

——第六場・決戦一の谷——

山の手に浮かび上がる義経と熊谷。

義経

また笛の音か。

熊谷

明日の戦に備えて心を落ち着けておるのでございましょう。

義経

相変わらず気楽なものだな。

熊谷

我ら東国の軍勢何万とあれども、戦の陣に笛持つ人はまさかおりませぬ。

義経

それがどうした。

熊谷

戦場に響く笛の音。実のところ、少し心惹かれております。

義経

その笛の音、やつらの張り巡らそうとしておる根と共に断ち切ってくれる。

熊谷

．．．我らも明朝に備えましょうぞ。

義経

ふふふ。

熊谷

いかがなされた。

義経

明朝など、ないわ。

熊谷

まさか、今宵．．．。

義経

今日は清盛の命日。法要の日に平家は戦を行わぬ。我らを迎え撃つ支度も明朝よ

り行なうであるう。

熊谷

しかし、法要の日に夜襲など．．．。

義経

だからよいのじゃ。構えている敵を討つのは難し。しかし明日来ると思っていた

熊谷

敵が今日きたとあらば．．．。

義経

もののふの道に背かれるおつもりか。

熊谷

道？

義経

不意打ちなど我らが兵法にございませぬ。とどまりください。

熊谷

できぬな。

義経

明かりはどうなさるのです。このような暗がりでは味方の手勢が無事敵陣にたど

熊谷

りつけるかも．．．。

義経

暗ければ、明かりを灯せばよいではないか。

熊谷

まさか．．．。

義経

皆に告ぐ。直ちに火を放て！熊谷、そなたは西から一の谷へ向かい先陣つかまつ

熊谷

れ。明朝になれば範頼殿が生田の森から攻め上る。くれぐれも先を越されてはな

義経

らん！

熊谷

義経様は。

義経

俺は、ここから駆け下りる。

熊谷

まさか、この道なき崖を！無茶でございませぬ！

義経

よいか熊谷、俺は古い道をなぞって歩くつもりはない。新しい道を俺がつけるの

熊谷

よ。まさかの坂を駆け下りる！これが義経の逆落とし！

軍勢、鬨の声。無数のひびく音。切り立った崖から騎馬武者たち。

群集駆け回り源氏の襲来を告げる。「源氏だ！源氏が来たぞ！」「弓を持って！」「討

「ちもらすな！」。

教経 何の騒ぎだ！

武士 1 源氏の夜襲にございます！

教経 夜襲だと！田舎武者の好みそうな卑怯な手よ。よいか！義経を捜せ！義経の首を取れ！

武士 2 申し上げます！大手の大將軍は蒲の御曹司範頼と見られます！

知盛 よいか！一人残らず討ち取れ！東の砦は破らせん！

武士 1 教経様！吾が方の勢が崩れだしております！

教経 何！

武士 1 来るはずのない崖から源氏武者が現れましたゆえ、鬼神かともごうた雑兵どもが我先にと逃げ出しております。

教経 鬼神であろうと俺が討ち取る！

武士 1 源氏は夜陰にまぎれておりますゆえその数が何千とも何万とも知れません！

教経 何万だろうがかまわん！引くことはならん！

武士 1 しかし火の手が御所に回れば帝が危のうございます！

教経 帝が……。

武士 1 ご決断を！

教経 義経……覚えておれ！

教経、退却。

武士 2 申しあげます！後方より火の手が上がりました！

知盛 そんなはずはあるまい！

振り返ると立ち上る黒煙。

知盛 どういうことだ！

武士 2 鴨越の崖から突如現れた源氏の軍に山の手の勢は混乱！教経様の奮戦むなしく退却を余儀なくされました！

知盛 砦の内に回られては分が悪い！退け！全軍海へ退却！帝と三種の神器をお守りしろ！

芳一 トキヒト！トキヒト！気を付けろ！

少年 敦盛は！？敦盛はどこ！？

芳一 人のことより自分の心配しろ。ここでお前が死んじまったらこの物語が終わっちゃう。

少年 物語なんてどうでもいいよ！敦盛！敦盛！

一方、生田の森では知盛と監物太郎が源氏の兒玉党に囲まれている。多勢に無勢、一瞬の隙について知盛に斬りかかる源氏。身を挺して守ったのは駆けつけた知章だった。

知盛 知章！

知章 なりませぬ！この旗は源氏に名高い兒玉党。ここで父上が討たれるようなことがございませぬ！

知盛 子に守られて何が平家の棟梁か！知章、命に代えてもお前を守る。

知章 立派に死ぬことこそ武門の誉れ！私は父上をお守りするのではない、平家をお守りするのは私です。

知章を源氏の騎馬軍が飲み込む。その後方に見えるのは源義経。

群集

1184年、一の谷の合戦。鉄壁の城郭を築き、再び都へと迫る平家を、源義経の奇襲が打ち砕く。勝負を決めたのは時の速さだった。誰もが破られるとは思わなかった教経の守る山の手。誰もが来るとは思わなかった断崖絶壁。その切り立った崖を猛然と駆け下りてきたのは軍神、源義経。これが世に言う 鶯越の逆落とし。』

騎馬の軍勢が駆け抜けた後、逃げ遅れた敦盛と熊谷が斬り合う。

敦盛は組み伏せられる。

笛の音が途切れる。

第七場 返す波

経を上げる声。線香の匂い。明かりがつくと人々が海から引き上げられた小宰相の亡骸を囲み、弔いをしている。すすり泣く声。

少年が立ち尽くしている。

少年　ねえ。敦盛は？敦盛はどこ。

知盛　．．．。帝に、お返ししたいものがございます。（笛を出す）

少年　これ敦盛にあげたやつ！帰ってきたんだ！どこ？敦盛どこ？

知盛　敦盛は、もう戻りませぬ。

少年　え？どうということ？

知盛　敦盛は討たれました。

少年　やだな．．．まじめな顔で嘘つくから。だまされないよ。

知盛　帝．．．。

少年　だって笛が。

知盛　この笛は敦盛の父上様に届けられたもの。

少年　なんで敦盛の笛が．．．。

知盛　一の谷で敦盛を討った熊谷次朗直実と申す者、供養のためにと送ってきたよしに
少年　ございます。

少年　一の谷で．．．そんな．．．。

知盛　お喜びください帝。あの敦盛があつぱれ坂東武者相手に一騎打ち。最期は笛吹き
少年　ながら斬られたとのこと。敦盛ばかりではありませんぞ、知章もまた立派な最期
にございました。

少年　え．．．？

知盛　源氏に名高い児玉党相手にただ一人、私を守るために、愚かな父守るため斬りこ
少年　むとは。何が大事か弁えた、立派な最期にございました。

少年　なんだよ、『立派』つて．．．。立派つてなんだよ。死んじやったらみんな同じ
でしょ。死に方にいいも悪いもあるかよ！

知盛　立派に死ぬのが、武士の生き方にございますれば。

少年　わかんないよ知盛。なんで死ななきやいいけないの。ねえ！何のために戦うんだ
よ！

——第八場・紅葉散る秋巖島——

海を見つめる知盛、振り返る。

知盛　時は満ちた、皆のものを舟を出せ。これが最後の戦よ。いざ、壇ノ浦！

白い波と赤い旗。最後の合戦が始まる。

群衆 1185年、平家一門最後の合戦。流れ流れし平家の衆の行きつく先は海の上、西の果てなる壇ノ浦。勝負の行方は、潮の流れが決める。

熊谷 義経様。わが軍劣勢にございます。

義経 さすがは舟戦に長けた平家よ。

熊谷 これが最後の戦と死に物狂いで戦っております。

義経 まずはやつらの足を止める。水夫を射よ！

熊谷 しかし舟こぐ水夫は兵ではございません。

義経 かまわん！皆に告ぐ、狙うは平氏にあらず。舟こぐ水夫を射よ！

喊声。

平家1 申し上げます！源氏は水夫を狙っております！

知盛 なんと恥知らずな！義経！勝てばよいのか！

熊谷 義経様。平家の動きが止まり始めました！

義経 間もなく潮の流れが変わる。帝のおわす御座舟を捜せ！

平家1 申し上げます。阿波民部重能、源氏方に寝返っております！

知盛 おのれ重能。

平家2 申し上げます。こぎ手を失った舟が次々と討たれております！

知盛 よいか、帝を御座舟からお移しせよ！やつらの狙いは帝！

平家1 申し上げます！潮が、潮の流れが逆向きに変わりました！

知盛、船の舳先に立ち戦況を望む。

知盛 ふふふ。時も潮も逆向きとは……。皆に告ぐ。戦は今日をかぎりなり。おのの少しも退くことなかれ！

喊声。群衆の中から教経飛び出してくる。

教経 義経はどこだ！

刀を振り下ろすと波が割れ、その先に義経と熊谷の姿。教経、義経に斬りかかるが熊谷に阻まれる。教経と熊谷、波の中で斬りあう。互角。

教経 坂東武者にも手ごたえのある者がおったようじゃ。汝は誰そ。

熊谷 武蔵野国の住人、熊谷次朗直実。

能登殿 熊谷……お前か……。敦盛を討ったのは。

熊谷 左様。

能登殿、突如声をあげ斬りかかる。

熊谷 さては敦盛殿のお身内か。

教経 いかにも。

緊張高まり二人が交錯する。凍りつく空気。

熊谷膝をつく。刀を置き、覚悟を決める。

熊谷 弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。……なぜ平氏が源氏にかなわぬかご存知か。西の武士は親が死ねば甲い子が死ねば悲しみのために攻めるのをやめる。だがな、東国のもは違う。親が死のうが子が死のうがその屍ふみ越えてまたさらに戦う。勝つためだったらなんでもやる。だから強いよ。しかしな、私はそんな戦い方が嫌になった。……一の谷の浜で敦盛殿は、負けるとわかって私との一騎打ちを受けてくださった。組み伏せて首を取ろうと思ったとき、そのあまりの若さまぶしくて、どこに刀をたててよいかわからなかったよ……。今わの際で敦盛は笛をお吹きなさいました。

よき笛の音でございましたなあ。どこか遠きところより響いてくるような。時違えば、音曲にてその名を残す、立派な大將軍でございましたな。

教経、聞き入っている。

熊谷 さあ、討ちなさい。生きていても仕方ない身。熊谷次朗直実は一の谷で敦盛殿の首を頂戴したとき、もう死んでおりますれば。

教経、刀を下ろしゆっくりと振り返り歩き出す。

熊谷 なぜ、なぜ斬らん！

教経 お前のためじゃない……。敦盛のためだ。生きろ！敦盛のために生きぬいて、

あいつの弔いしてくれ。・・・我ら平家には、もはやそれができぬのだ。

教経、台上に上がる。

熊谷 名を……。そなたの名をおきかせください。
教経 能登守教経。

教経、海中に身を投じる。
トキヒト、徳子出てくる。

徳子 帝、こちらへ。

少年 それは。

徳子 神代の昔から我が国へ伝えられし草薙剣。

少年 貸して。

徳子 いかがなさるおつもりか。

少年 源氏の狙いは僕なんだ。だからこれ持って戦やめてっていつてくる。

徳子 なりませぬ！ 三種の神器は帝の証。源氏の手には渡ればわれらは朝敵。この戦の大義が失われるのです。

少年 大義とか、名誉とかそんなのどうだっていいじゃないか。

徳子 それでもわれらは参るのです。

少年 どこへ。

徳子 極楽浄土というめでたいところへ。

少年 極楽、

徳子 帝。波の下にも都はさぶろうぞ。

三種の神器を抱いた徳子が波にのまれる。しだいに源氏の白旗が舞台を埋め尽くしてゆく。波の向こうに知盛の姿が見える。

知盛 帝、ご覧ください。弥生も末の五日というに、この春の海が源氏の白に埋め尽くされて、まるで季節を違えて降り積もる雪のようですな。

少年 何のんびりしたこと言ってるんだよ。はやく逃げなきゃ。

知盛 逃げる？ ご冗談を。

少年 冗談じゃないよ。この戦はどうやたつて負けるんだよ。この戦いに勝った頼朝は幕府を開くんだ。もう未来は決まってるんだよ。

知盛 また先の世の話でございますか。いよいよ源氏の時代となるのですね。

少年 でもそんな時代長く続かないから。源氏だって平氏だっていない世の中が来るん

だ。戦う者はいつか滅んじゃうんだから。

知盛 『戦をすれば滅びる』・・・道理ですな。

少年 そんなこと未来になったら誰でも知ってるよ。

知盛 未来ですか。となれば、その先の世では戦そのものがなくなるのですね。

少年 戦は・・・ある・・・。いろんな国が、戦、続けてる。

知盛 ふふふ・・・。面白いですな。滅びると皆が知っていないながら戦い続ける世の中ですか。その国は、いったいどこへゆきつくのでしょうかね。

少年 ……。

知盛 ながれながれし平家の衆のゆきつく先は雲の上、雪ふる先の雲の上・・・。帝、いよいよ平家の世も終わりにございます。けれども帝、波の下にも都はございませれば、後の世で、帝の笛の音をおきかせください。

少年 だめだよ！ 死んじゃ。笛なんていくらでも聴かせてあげるから。死んじゃだめだ！

知盛 帝！ 弓矢とりは年頃いかなる高名候へども、最期の時不覚しつればながき疵にて候。平家の滅んでゆくさまを見届けて散るのが、わたくしの最後の役目かと存じます。

少年 高名なんてどうだっていいじゃないか！。今こうしている間にも人が死んでるんだよ。それを止めるのが人の上に立つ者がやらなきゃいけないことじゃないの。ありがたきお言葉なれど、今はこの世で見るとべきものは見果てつ。帝、もしも、もしも今より千年後の世がざいますならば、お語りください。平安なる世に浮かれ戦い沈んでいった、愚かな平家の物語。この国が再び水の底に落ちぬよう、その後千年続く平成なる世をお築きください。親と子が、愛する者たちが二度と悲しき別れを致さぬように。波の下の都にて見つめておりますぞ、我ら一門その日くるまで。ながれながれし平家の衆のゆきつく先はいつくしま、紅葉ふるあきいつくしま・・・。やはり白ではございませんな。この海には平家の赤がよく似合う。

知盛 時知らぬ波と水面と白雪を紅葉で染めて水底へいけ

知盛、自らの首を掻き切る。壇ノ浦を埋め尽くしていた源氏の白旗が、刹那、平家の赤に染まる。それはまるで紅葉が海面を染めるような光景。

海辺に佇む一人の僧。何かつぶやいているようにも歌っているようにも見える。

芳一 おこれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。夢から覚めちまう前に聞いとくれ。ひとたび俺が語りだせば鬼神も涙を流す、平家と呼ばれた一族が海へと消えた物語。祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり。よし、できた。

芳一 トキヒト！トキヒト。おかげさんでいい物語ができた。昔々の、戦いのお話。・でもな、この物語に終わりはないんだ。なぜかって？物語ってのは人から人へと時を超えて語り継ぐもんだからさ。次の語り手は、お前の、いやお前たちの番だ。

芳一は語る。できたばかりの、いや、昔から語り継がれた物語を。

芳一 むかしむかし、このあたりにおじさんとおばあさんがいたそうさ。二人の娘をよこせと言ってきたオロチと戦ったのがスサノオノミコト。オロチの尾から出てきたのが草薙の剣。その剣を持って鬼が島に鬼退治に出かけたのが桃太郎。いや、一寸法師だったかな。クマと相撲をとったのは足柄山の金太郎。かちかち山のタヌキをウサギは懲らしめ、サルとカニは合戦をした。源氏と平家は戦って織田は明智に滅ぼされ明智は豊臣に滅ぼされ豊臣もまた徳川に、徳川もまた……。西とか東とか右とか左とか赤とか白とか、いっつもどっかに線引いて、なんだか、ずーっとけんかしてきてたな。戦って戦って戦い続けたその果てにいつかはみんなそこへいく。時の流れの水底へ。

トキヒト だから僕たちは立つ。流れに流されないようしっかりと地につけて立つ。そしてしっかりと飛び上る。高く高く飛び上る。好きとか嫌いとか損とか得とかそんな目の前のことばかり見ずに、過去も未来もあそこもここも、太陽さんとおんなじ高さでぜーんぶ見渡す鳥になる。僕の名前はトキ。ニッポニアニッポン。この国の名だ。

大きな大きな日が昇る。浮かれ踊る人々。赤でもない白でもない桜が舞う。

—幕—

*参考

「小学館 日本古典全集 平家物語」

「三省堂 平家物語ハンドブック 小林保治」

「集英社 学習漫画 日本の歴史 6・7」

